

第3章 出土石製品の分析

第1節 石製品の概要と分析法

今回対象とする石製品は、石棒・石刀・石剣類 68 点、独鈷状石器 4 点、円盤状石製品 343 点、異形礫 4 点、石製玉類 31 点、岩版 5 点、その他石製品 2 点である。

整理の手順はまず遺物の注記をもとに台帳との照合作業を行った。次に注記が不鮮明あるいは不明なものを含めて、新たに弘前大学の整理番号として遺物番号（弘大番号）をつけた。その後石棒・石刀・石剣で胴部断面形態や柄頭形態がわかるもの 48 点、独鈷状石器 4 点、円盤状石製品 49 点、異形礫 4 点、石製玉類 31 点、岩版 5 点、その他石製品 2 点の計 143 点を図示した。また、円盤状石製品については長径による分類を、その他のものに関しては先行研究をもとに分類した。

第2節 石棒・石刀・石剣

計 68 点ある。器種判断は、断面形が円形で刃部がないものを石棒、片側面に刃部があるものを石刀、両側面に刃部をもつものを石剣とした。すべて破損し、完形品はない。なお小片で断面形が不明なものも多数ある。そこで、器種判断が難しいものは一括して石刀・石剣類とする。また破片を再利用した刃器が 1 点ある。なお、整理の過程で、対象外の 1957・58 年調査出土資料 5 点（石棒 2 点、石刀 2 点、石刀・石剣類 1 点）が含まれていることが分かった。そこで、参考資料としてこれも掲載した。結果、石棒 10 点、石刀 32 点、石剣 4 点、石刀・石剣類 21 点、石刀片利用成品 1 点に区分される。なお型式分類は後藤（1986・1987）に拠った。

上記 68 点のうち、台帳などから出土位置を推定したものは 63 点である。出土区は東区 32 点、西区 24 点、そのほか 2 点である。層序別では、東区 7b 層（山王Ⅲ式期）1 点、東区 10～14 層（大洞 A 式期）9 点、東区 15～26 層（大洞 C2 式期）22 点である。西区は西区Ⅲ層（山王Ⅲ式期）7 点、西区Ⅴ層（大洞 A2 式期）7 点、西区Ⅵ層（大洞 A1 式期）8 点、西区Ⅶ層（大洞 C2 式期）2 点である。大洞 A'～山王Ⅳ上層式期の西区Ⅳ a・b・j・k 層（以下Ⅳ上層）および西区Ⅳ 1・m・n 層（以下Ⅳ下層）にはない。

石材は粘板岩が大半を占め 58 点（85%）で、頁岩が 3 点（3%）、砂岩 2 点、玄武岩・安山岩・緑色岩・珪化木がそれぞれ 1 点である。また 73 点のうち 17 点（25%）が被熱、白く変色する。

（1）石棒（図 37-1～9）（図版 32）

石棒 10 点のうち残存率が比較的高い 9 点を図化した。その他は小片である。1・2 は頭部が無文の石棒である。1 は西区Ⅲ層出土である。胴部部分で破断、かつ縦半分が欠損する。長さ約 21 cm 分が残存し、復元すると長さ約 50 cm の両頭石棒になるとみられる。頭部は径 3.1 cm である。全面に研磨痕を残す。粘板岩製である。2 は東区 12 層出土である。頭部と胴部の一部を残す。粘板岩製である。3 は東区 21 層出土である。長さ約 26 cm 分が残存し、長さ 40～50 cm の単頭石棒になるとみられる。頭部は径 3.4 cm の胴張で縦断面が四角形であり、2 条の沈線の間半円状の沈線が施される。胴部には縦方向の研磨痕が観察される。粘板岩製である。4 は東区 10 層出土で、3 と同じく縦方向の研磨痕が全面に観察される。5・6 は 1957・58 年出土資料である。5 は棒状で頭部を明瞭に作り出さない無頭石棒である。頭部～胴部 20 cm ほどが残存し、復元長さ 40～50 cm とみられる。5～8 は表面全体に連続敲打による整形痕が全面に観察され、それを覆うように縦方向の研磨痕がある。粘板岩製である。9 は珪化木製で研磨痕が一部に残る。

(2) 石刀 (図 37-10～12、図 38-1～12、図 39-1～15) (図版 32～34)

石刀 32 点のうち残存率が比較的高い 30 点を図化した。その他は小片である。図 37-10・11 は石棒に比べ、断面が扁平な長方形を呈す。10・11 はいわゆる九年橋型石刀とみられる。10 は西区Ⅲ層出土の柄部である。頭部は幅 2.9 cm の台形で 3 条の沈線を巡らす。刃部を失うが、柄部と胴部の境界に 2 条の沈線が巡る。頁岩製である。11 は東区 22 層出土である。頭部は幅 3.1 cm の台形で、無文である。柄は短く、頭部から 2 cm のところから刃部が始まる。刃の平面形は直刃である。棟には幅 2 mm 程度の断面 V 字形の溝が施される。粘板岩製である。12 は東区 25 層出土である。長さ約 21 cm が残存する。頭部は径 2.7 cm の卵形である。上下各 2 条の沈線が巡る。柄は短く、頭部から 2 cm のところから刃部が始まる。刃の平面形は直刃である。棟は円形である。粘板岩製である。

図 38-1～9 は柄部だけの破片である。1 は東区 18 層出土である。頭部は二段ある。頭部は台形で、縁に沿って台形の沈線を表裏面それぞれに巡らす。刃の一部が残るが刃関が明瞭ではない。粘板岩製で被熱している。柄頭の一部が黒色化する。2 は東区 13 層出土である。頭部は三角形で造りがやや粗い。粘板岩製である。3 は東区 20 層出土である。刃部が破損するが頭部から 22 cm が残り、復元すると長さ 35～40 cm とみられる。形態は九年橋型石刀である。頭部は台形で、上下 2 条の沈線を巡らし、その間に横位の弧文を左右側面に沿って挿入する。柄頭左右側面の下部には孔を穿つ。柄は 10 cm と長い。刃部は直刀で刃関が明瞭につく。棟は平坦でそこに幅 2 mm 程度の断面 V 字形の溝を入れる。粘板岩製である。4 は西区Ⅲ層出土である。九年橋型石刀と推定される。頭部は台形で無文である。柄は 5 cm ある。棟の断面は円形で、幅 2 mm 程度の断面 V 字形の溝を入れる。粘板岩製である。5～8 は頭部が円形の柄部である。5 は西区Ⅵ層出土である。頭部は楕円形で端部のみ面取りする。柄の長さは 8 cm ほどあり長い。粘板岩製である。6・7 は幅広形の柄部である。6・8 は東区 19 層、7 は西区Ⅶ層出土、9 は層位不明である。柄頭から約 20 cm が残存し、復元長さ 40～45 cm と推定される。頭部は明瞭に作り出さない。柄はほとんどなく、頭部直下から、刃部を研ぎ出す。刃部は残存部では内反りで先端に近づくくと外反りに変わる可能性がある。棟の断面は円形である。粘板岩製である。8 は柄頭と柄部が沈線で区画されるが、明瞭には頭部を作り出さない。柄部は約 10 cm と長く、刀身に向かって広がることから、刀身幅はそれより大きいとみられる。

図 38-10～図 39-14 は刀身の一部である。図 39-1・8・13 は西区Ⅴ層、図 39-2 は西区Ⅲ層、図 39-4・5 は東区 10～14 層、図 39-6・7 は東区 15～25 層、図 39-9 は西区Ⅵ層、図 39-10・12 は西区Ⅶ層、図 38-11・図 39-3 は 1957・58 年調査出土である。図 38-10～図 39-4 は細形で、図 39-5～14 は幅広形である。刃部は図 38-10～12、図 39-1・2 が直刃、図 39-3～14 が内反る。棟の平面形は図 38-10、図 39-1～5・7～14 が外湾、図 38-11・12、図 39-8 が直線状である。棟の断面は図 38-10～12、図 39-1～4 は平坦面を作り出し、図 39-5～14 は円形あるいは不明瞭である。全て粘板岩製である。図 39-15 は未加工であるが、棒状で片側面が刃部様であるため、石刀様の搬入礫として掲載した。石材は安山岩である。

(3) 石剣 (図 40-1・2) (図版 35)

石剣 4 点のうち残存率が比較的高い 2 点を図化した。その他は小片である。図 40-1・2 は石剣の剣身の一部である。1 は西区Ⅲ層出土である。扁平で幅 3.3 cm である。左右両側に刃部を作り出す。2 は西区Ⅵ層出土である。棒状で、形態や製作技法は図 37-4・5 の石棒に類似する。全体を連続敲打により整形した後、研磨する。刃付けが不明瞭で、刃部角は他に比べ鈍く、断面形が杏仁形になる。粘板岩製である。

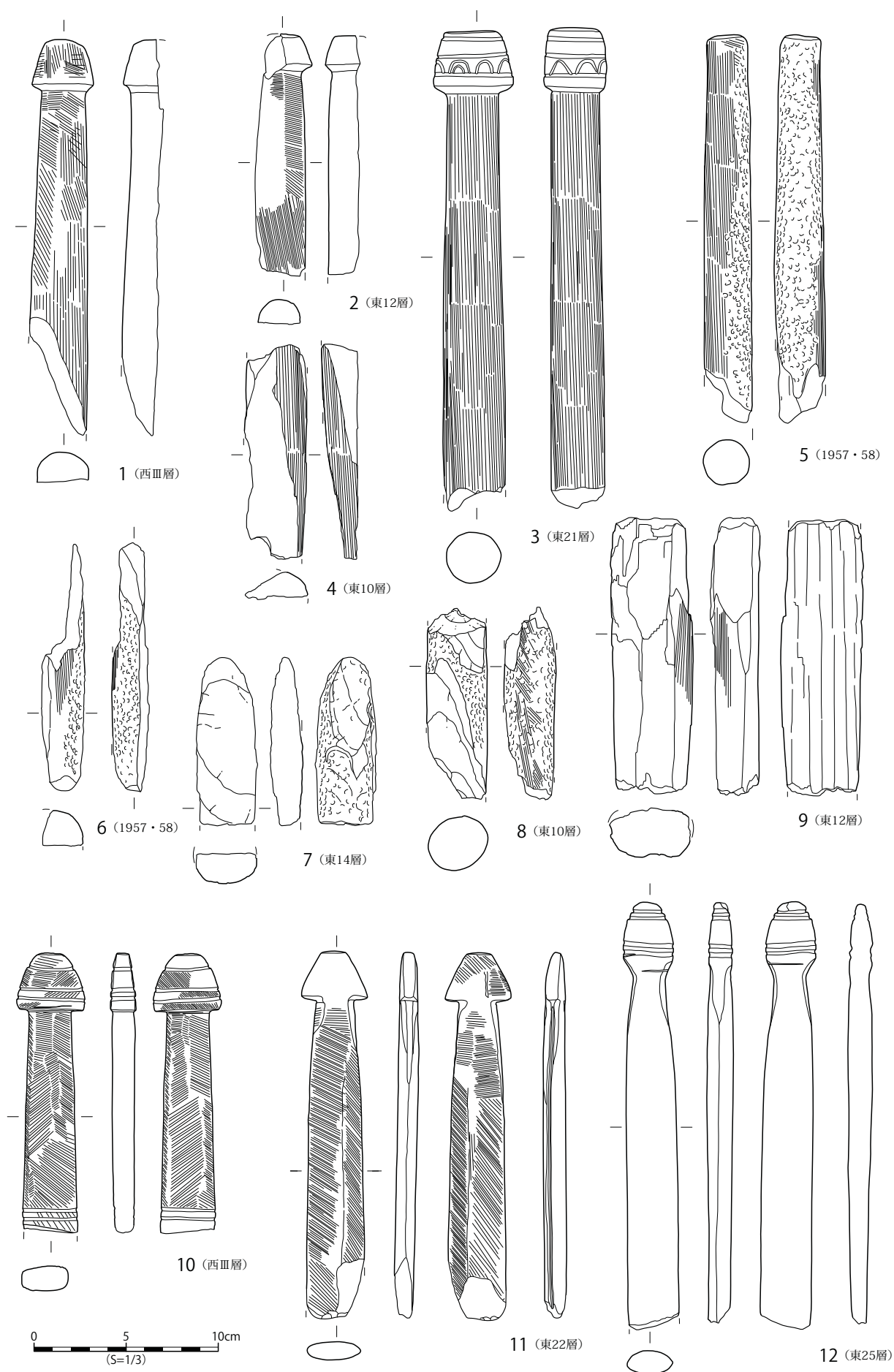


図 37 山王冢遺跡石製品 1 石棒・石刀

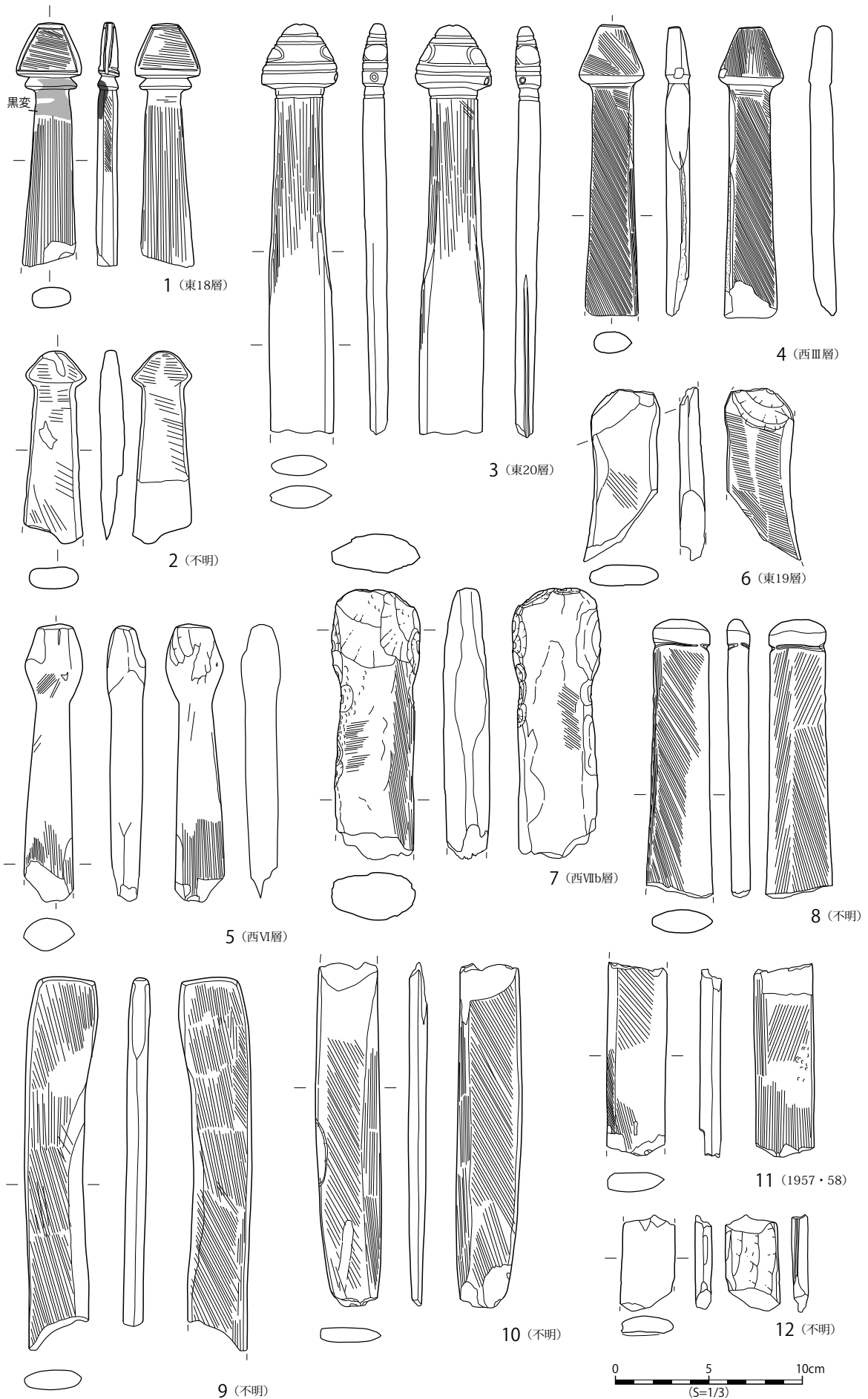


図38 山王冢遺跡石製品2 石刀

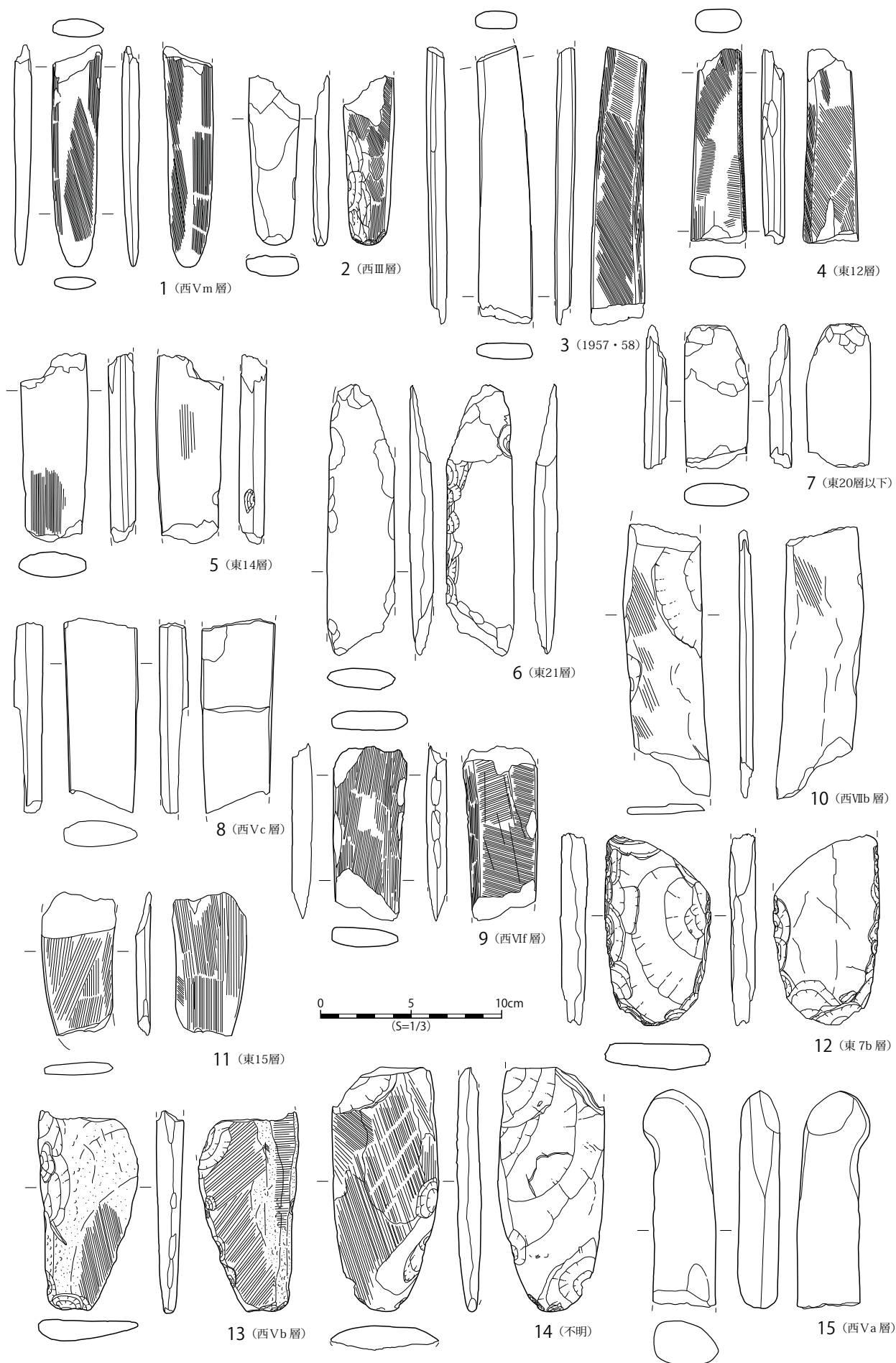


図 39 山王冢遺跡石製品 3 石刀

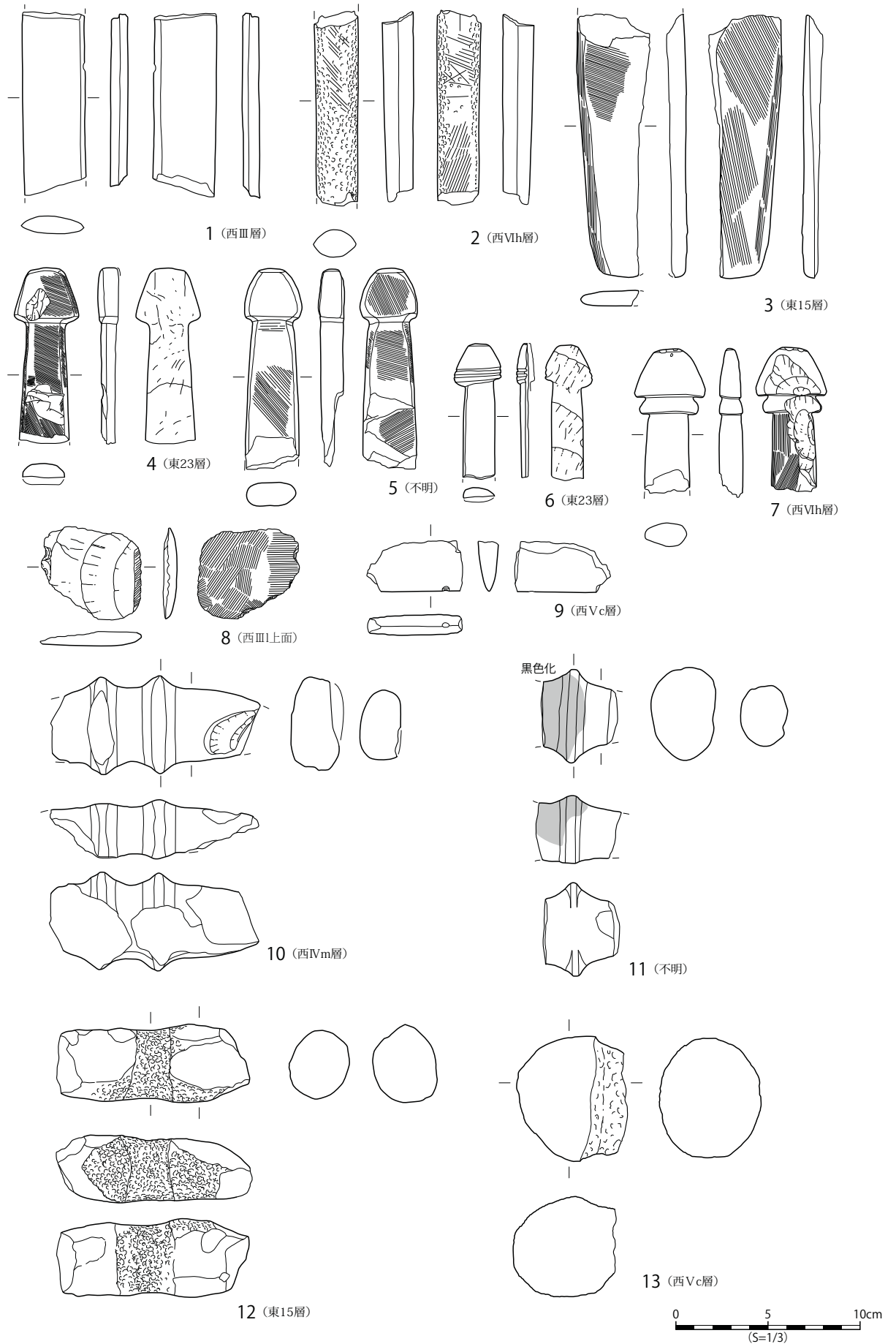


図40 山王冢遺跡石製品4 石剣、石刀・石剣類、独鈷状石器

(4) 石刀・石剣類、石刀片利用製品 (図 40-3～9) (図版 35)

石刀・石剣類 21 点のうち残存率が比較的高い 7 点を図化した。その他は小片である。刃部がない柄部だけの資料で、石剣か石刀のいずれかと判断される。全て断面が扁平で、図 40-4～7 には台形の頭部がある。

3 は東区 15 層出土である。刀身のみで幅広形の石刀の可能性が高い。4 は東区 23 層出土である。頭部は台形で無文である。粘板岩製で被熱し変色する。5 は丸みのある台形で無文である。6 は東区 23 層出土である。4 と同様に縦半分を欠く。頭部は台形で 2 条の沈線を巡らす。粘板岩製で被熱により変色する。5 は西区Ⅵ層出土である。頭部は 2 段の台形で無文である。粘板岩製で、被熱により変色する。8 は 3 cm 角の石刀片の剥離面縁辺を研磨し刃部を作り出す。西区Ⅲ層出土である。9 は他とは異なる石材が使われ、刃部様の断面 V 字形の小片である。擦切石器にもみられるが、擦痕がないため、便宜的に石刀・石剣類に加えた。西区Ⅴ層出土である。

第 3 節 独鋸状石器 (独鋸石) (図 40-10～13) (図版 35)

独鋸状石器 (独鋸石) は 4 点出土した。すべて破損品である。図 40-10 は大洞 A' 式期の西区Ⅳ層出土である。被熱により半分が変色する。左右先端を欠くが、左右先端が尖状で長幅 15 cm 程に復元される。左右 2 条の隆帯が巡り、全体形は反る。図 40-11 は中央の一部である。隆帯が残る。全体形は図 40-10 に類似する。被熱し、中央の隆帯間が黒色化する。12 は東区 15 層出土である。未成品とみられる。連続敲打によって中央に幅 3 cm ほどの溝を巡らせる。隆帯はまだ形成されていない。11 は大洞 A 式期の西区Ⅴ層出土である。半分ほどが残る。本資料は他と異なり、中央に溝を巡らせるのみで、その他には整形痕はない。連続敲打によって中央に溝を巡らせる。石材は 10・12・13 が安山岩、11 が砂岩である。

第 4 節 円盤状石製品 (図 41～43-12) (図版 36～38)

円盤状石製品は扁平な素材の周縁を剥離や敲打により円形に整形した石製品である。「石製円盤」や「円盤状石器」の呼称があるが、本書では「円盤状石製品」と呼称する。

円盤状石製品は計 343 点ある。調査区別では東区 170 点、西区 122 点、不明 51 点ある。大きさ平均は長径 6.1 cm、短径 5.7 cm、厚さ 1.8 cm、重量 123g である。層位別では東区 9b 層 (大洞 A' 式期) 1 点、同 10～14 層 (大洞 A 式期) 19 点、同 15～26 層 (大洞 C2 式期) 149 点、西区Ⅳ下層 (大洞 A' 式期) 12 点、同Ⅴ層 (大洞 A1 式期) 17 点、同Ⅵ層 (大洞 A1 式期) 71 点、同Ⅶ層 (大洞 C2 式期) 21 点であり、大洞 C2 式期を中心に大洞 A1 式期まで盛行する。大洞 A2 式期に急減し、山王Ⅳ上層式期や山王Ⅲ層式期など弥生時代へは継続しない。

石材は全 344 点中 260 点が安山岩で全体の 77% を占める。次いで凝灰岩 37 点 (11%)、砂岩 18 点 (5%)、閃緑岩 7 点、頁岩・粘板岩各 5 点ずつ、玄武岩 4 点、玉髓 2 点である。礫面の状態から河川転礫とみられ、ほとんどは付近の河川にある扁平礫を搬入してきたとみられる。また付着物は、全体の 3% にあたる 10 点にあり、それらのうちアスファルトが 3 点、アスファルトもしくはススの可能性がある黒色物が 5 点、赤色顔料が 3 点に付着する。被熱により変色する例が 6 点ある。

分類については本遺跡で出土している円盤状石製品は長径と短径がほぼ 1:1 の円形に整えられる。分類の際には、欠損品の多さを考慮し、残存率が高い長径による分類を行った。また長径と重量は比例する。そこで、長径を基準に小型・中型・大型に分類した。

小型：長径が 5 cm 未満のもの。18～90g、平均 43g、48 点。

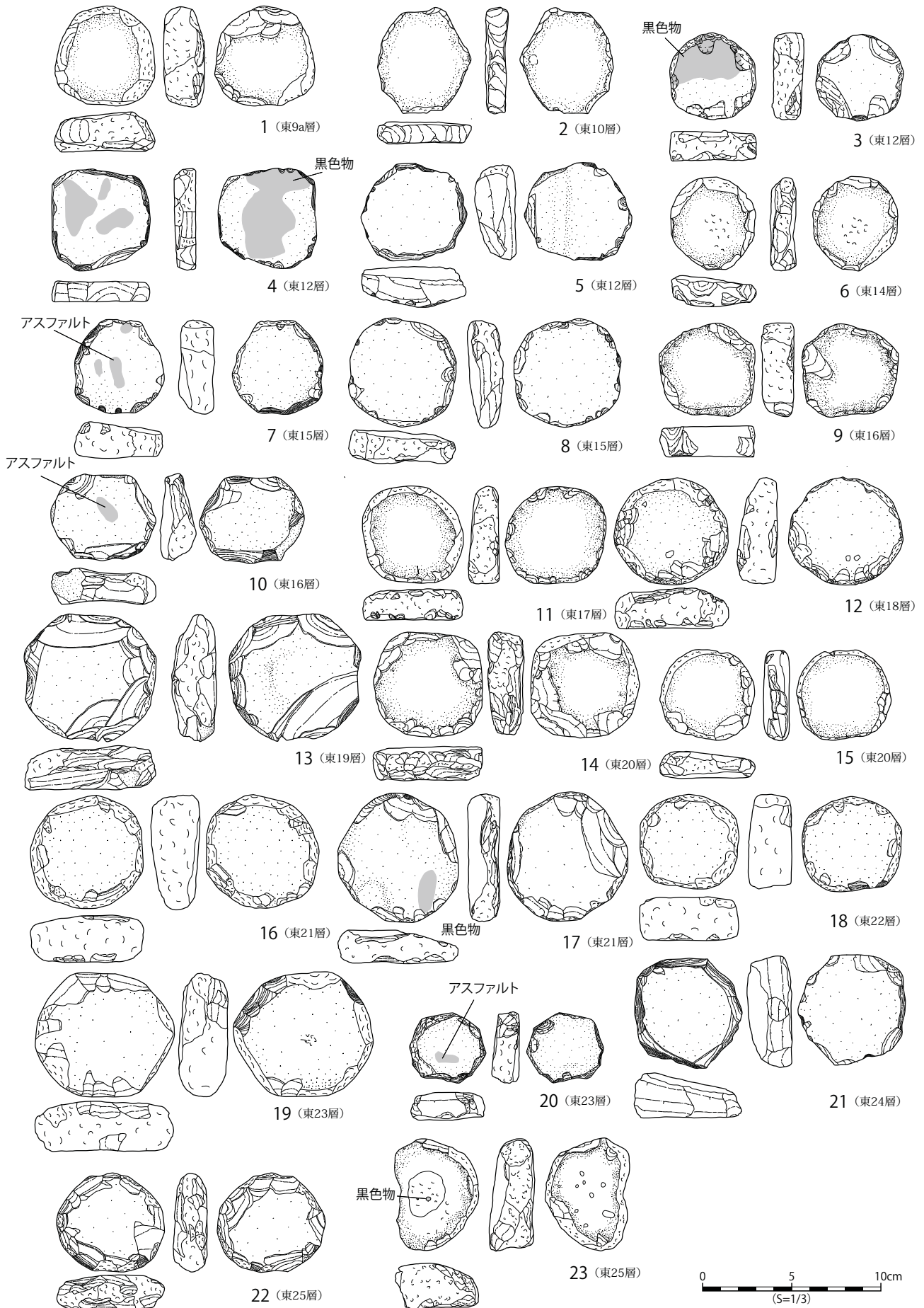


図41 山王岡遺跡石製品5 円盤状石製品

中型：長径が5 cm以上7 cm未満のもの。30～190g、平均100g、221点。

大型：長径が7 cm以上のもの。60～800g、平均240g、75点。

中型が6割以上を占める。製作は扁平礫の周縁を硬い台石などに叩きつけて角を取る方法を用いたとみられる。そのため、打点がつぶれた剥落が周囲に観察され、最終的に周縁は石器製作用ハンマーの使用痕と同じような敲打面を形成する。さらに周縁に観察される敲打面の角が磨滅しているものもあり、これは使用痕と判断される。

図41-1は東区9a層出土である。径5.5 cm、厚さ2.1 cm、重さ111gで中型に属す。連続敲打によって周縁が円形に整えられる。

図41-2～6は東区10～14層出土である。東区10～14層19点の大きさ平均は径5.8 cm、厚さ1.7 cm、重さ110gで小型5点、中型11点、大型3点で、ほぼ平均的である。図41-3・4には黒色物が付着する。石材は安山岩14点、凝灰岩2点、砂岩1点、粘板岩2点である。

図41-7～図42-2は東区15～26層出土である。東区15～26層149点の大きさ平均は径6.2 cm、厚さ1.8 cm、重さ123gで小型22点、中型91点、大型36点で、大型化する。図41-7・10・21にアスファルトが付着する。アスファルトは表面のみ中央に長径2 cmほどの楕円形の範囲に付着する点共通する。また図41-17・24、図42-1に黒色物が付着する。いずれも点的に広い範囲に認められる。図41-19は軟質な凝灰岩が用いられる。表面に2条1単位とする3本の放射状の線刻がある。裏面はランダム方向の線状痕が多数ある。同じように図42-1にも表面に2条1単位とする3本の放射状の線刻がある。製作法や大きさは円盤状石製品と同じである。図41-20・24、図42-2のような中央に敲打の集中による凹痕が観察されるものが6点ある。大型品に多く、凹痕は磨石・敲石類の凹痕分類凹B・凹D類があり、比較的細かな敲打痕が集中する。よって大型品の一部には台石としての用途もあったとみられる。石材は安山岩106点、凝灰岩4点、頁岩2点、玄武岩1点、砂岩1点、閃緑岩2点、粘板岩1点で、安山岩を主体としつつも、種類は多様である。

図42-3・4は西区IV下層出土である。西区IV下層12点の大きさ平均は径6.3 cm、厚さ1.9 cm、重さ132gで小型2点、中型7点、大型3点である。図42-3は大型、図42-4は小型品である。図34-3には中央に敲打の集中による凹痕が観察される。図42-3は大型品であることから、東区15～26層で観察されたものと同じように台石としての用途もあったとみられる。石材は安山岩7点、凝灰岩3点、砂岩2点である。

図42-5～14は西区V層出土である。西区V層17点の大きさ平均は径6.6 cm、厚さ1.8 cm、重さ138gで小型1点、中型12点、大型4点でIV下層と同じ傾向である。図42-9・13に赤色顔料が付着する。赤色顔料の付着は他の層では見られず、この層の特徴かもしれない。図42-14は半球の頭を欠いた形状で側縁を剥離する。円盤状石製品の未成品とみられる。形状の特徴から、もとは大型石棒の一部であった可能性がある。円盤状石製品の石材は安山岩10点、凝灰岩6点、閃緑岩1点である。

図43-1～9は西区VI層出土である。西区VI層71点の大きさ平均は径6.0 cm、厚さ1.9 cm、重さ117gで小型13点、中型45点、大型13点で、上層に比べ小型が増加する。図43-8は本対象中最も小さいもので、径3.6 cm、重さ18gである。片面からの剥離で円形に整える。中型品1点に赤色顔料が付着する。数の割には付着物が少ない。石材は安山岩61点、凝灰岩6点、玉髓1点、頁岩2点、粘板岩1点である。

図43-10・11は西区VII層出土である。西区VII層21点の大きさ平均は径6.1 cm、厚さ1.8 cm、重さ117gで小型1点、中型17点、大型3点で、西区VI層や同時期の東区15～26層と同じ傾向にある。付着物はない。図43-10・11とも中型品である。石材は安山岩16点、凝灰岩3点、玄武岩1点、砂

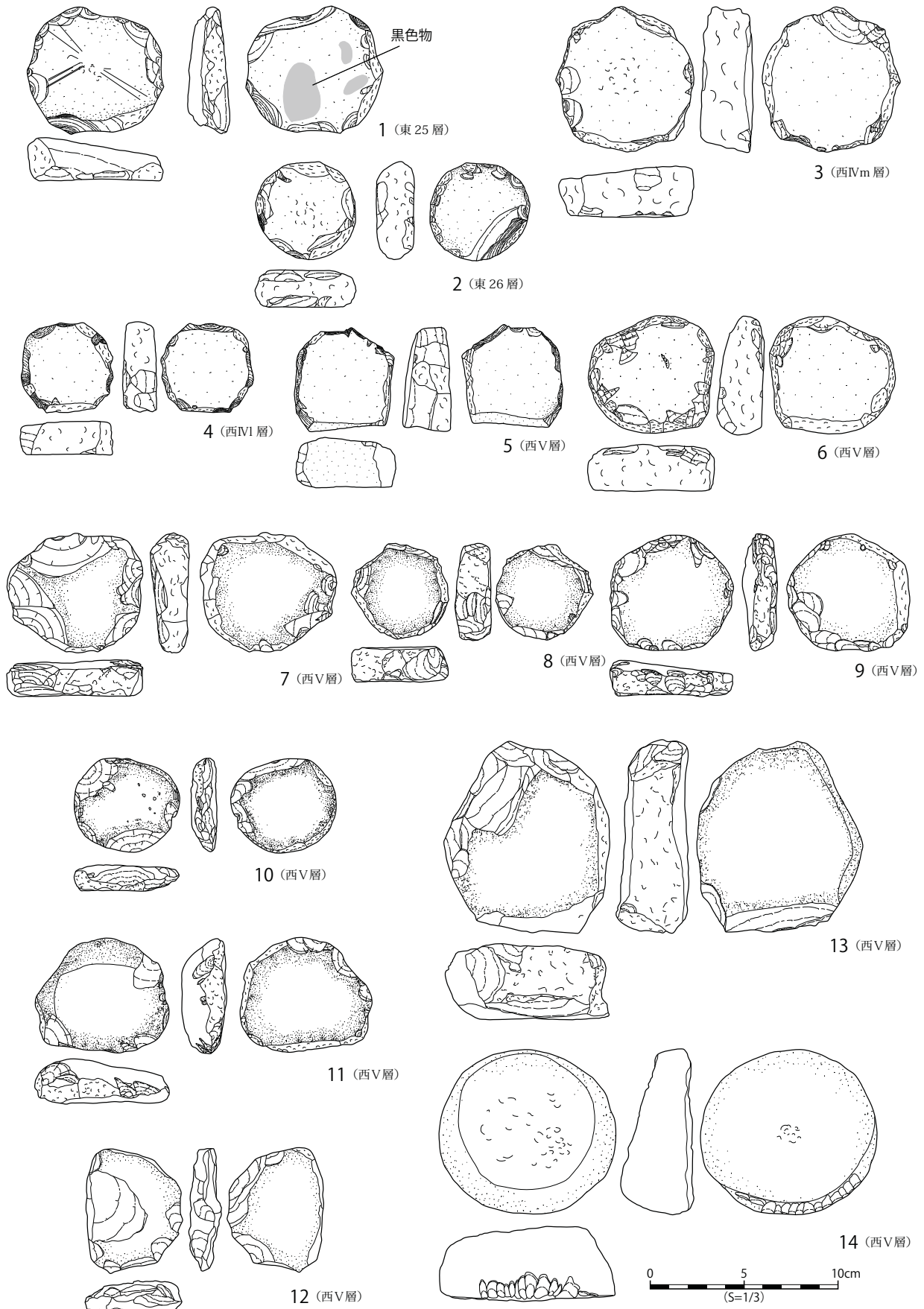


図 42 山王冢遺跡石製品 6 円盤状石製品

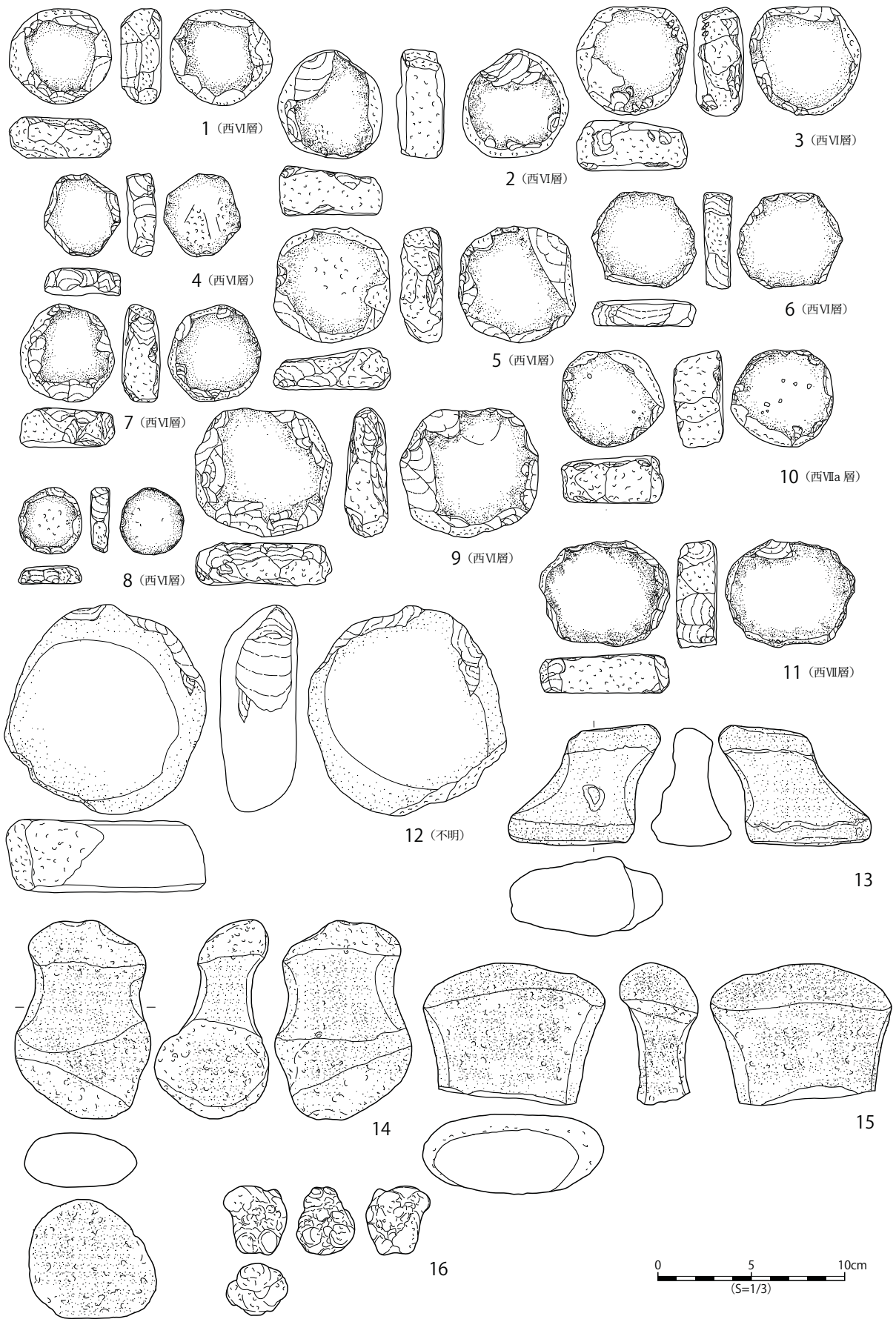


図 43 山王冢遺跡石製品 7 円盤状石製品・異形礫

岩1点である。

図43-12は出土区不明である。本対象中最も大きい例で径10.3cm、厚さ4.1cm、重さ759gである。礫の側縁に敲打面が観察され、剥落痕が少ないことから未成品とみられる。

第5節 異形礫（図43-13～16）（図版38）

搬入された自然礫のうち、使用痕や製作痕がなく楕円や球などとは異なり、後に使用の可能性がほとんどない不定形なもの。4点ある。図43-13～15は中央がくびれる。図43-13は大洞C2式期の東区23層出土である。石材は砂岩である。図43-14は東区15層出土である。石材は安山岩である。図43-15は層位不明である。石材の軟質な部分が水流による浸食作用で削りとられた結果、このような形になったとみられる。石材は安山岩である。下部は破損する。図43-16は大洞A式期の東区13層出土である。凝灰岩製で、硬質な部分が接続した複数の球状を呈す。

第6節 石製玉類（図44-1～31）（図版39）

石製玉類は計31点ある。なお玉類は後述する土製品にも多数あるため、ここでは石製に限り説明する。勾玉・平玉・丸玉・管玉の4種がある。内訳は勾玉3点、平玉25点、丸玉1点、管玉2点である。なお台帳では勾玉2点、管玉1点、平玉（小玉・青玉）23点、計26点分が記載されている。その層序をみると、勾玉は3点とも西区V層、平玉（小玉・青玉）は東区15～26層3点、西区V層19点、西区VI層1点、不明3点、管玉1点は東区14層、西区V層各1点である。西区V層（大洞A2式期）が多い。これは西区Vb5層において勾玉1点、平玉15点、土玉8点が一括出土したという記載がある。よって石製玉類の多くは大洞A式期で、弥生時代はほとんどなく、大洞C2式期まで遡るものがあるとみられる。石材同定は肉眼での観察では限界があるため、ヒスイかどうか確認するために、比重測定、磁性観察を実施した。その結果、確実なヒスイは1点のみで、ネフライト18点、緑色凝灰岩8点、凝灰岩4点となる。ヒスイ以外の石材は今後の分析によりさらに細分される可能性がある。

図44-1～3は勾玉3点である。大きさは長さ1.2～1.5cm、厚さ0.2～0.4cm、重さ0.4～0.9gで3点ともほぼ同じ大きさである。これらは晩期の勾玉の中では小型で薄い。また整形の程度が小さく、礫素材の形態をそのまま生かして作られるため、形がやや歪である。3点ともネフライト製である。図44-1は頭部に刻み目が無い定形勾玉である。頭部と尾部の大きさはほぼ同じである。図44-2は頭部に刻み目を持つ定形勾玉である。内側の湾曲が弱くその上部に1本刻み目を入れる。図44-3も頭部に刻み目を持つ定形勾玉である。

図44-4は管玉である。西区V層出土である。約半分が残り、残存長0.6cmで小型である。石材は緑色岩である。

図44-5～30は平玉26点である。東区15～26層（大洞C2式期）3点、西区V層19点、西区VI層1点ある。西区V層が多く、西区Vb5層の一括出土品も含まれる。大きさは径0.5～1.2cm、平均径0.8cm、厚さ0.2～0.9cm、平均厚さ0.4cm、重さ0.1～0.9g、平均重さ0.27gである。おおむね径と厚さの比が2:1で表裏面を平坦に面取りする平玉である。石材はヒスイ1点、ネフライト14点、緑色凝灰岩7点、凝灰岩4点である。凝灰岩・緑色凝灰岩の平均径0.8cm、ネフライトの平均径0.7cmでネフライトのほうが一回り小さい。図44-5は凝灰岩製の未成品で、表裏面を平坦に研磨し穿孔した後に、周縁を円形になるように研磨整形する。図44-6は本資料中最も小さい平玉で径0.5cm、厚さ0.2cmである。

図44-29は丸玉で、小玉のなかでは本資料中最も大きい。ヒスイ製である。径1.2cm、厚さ0.9cmである。

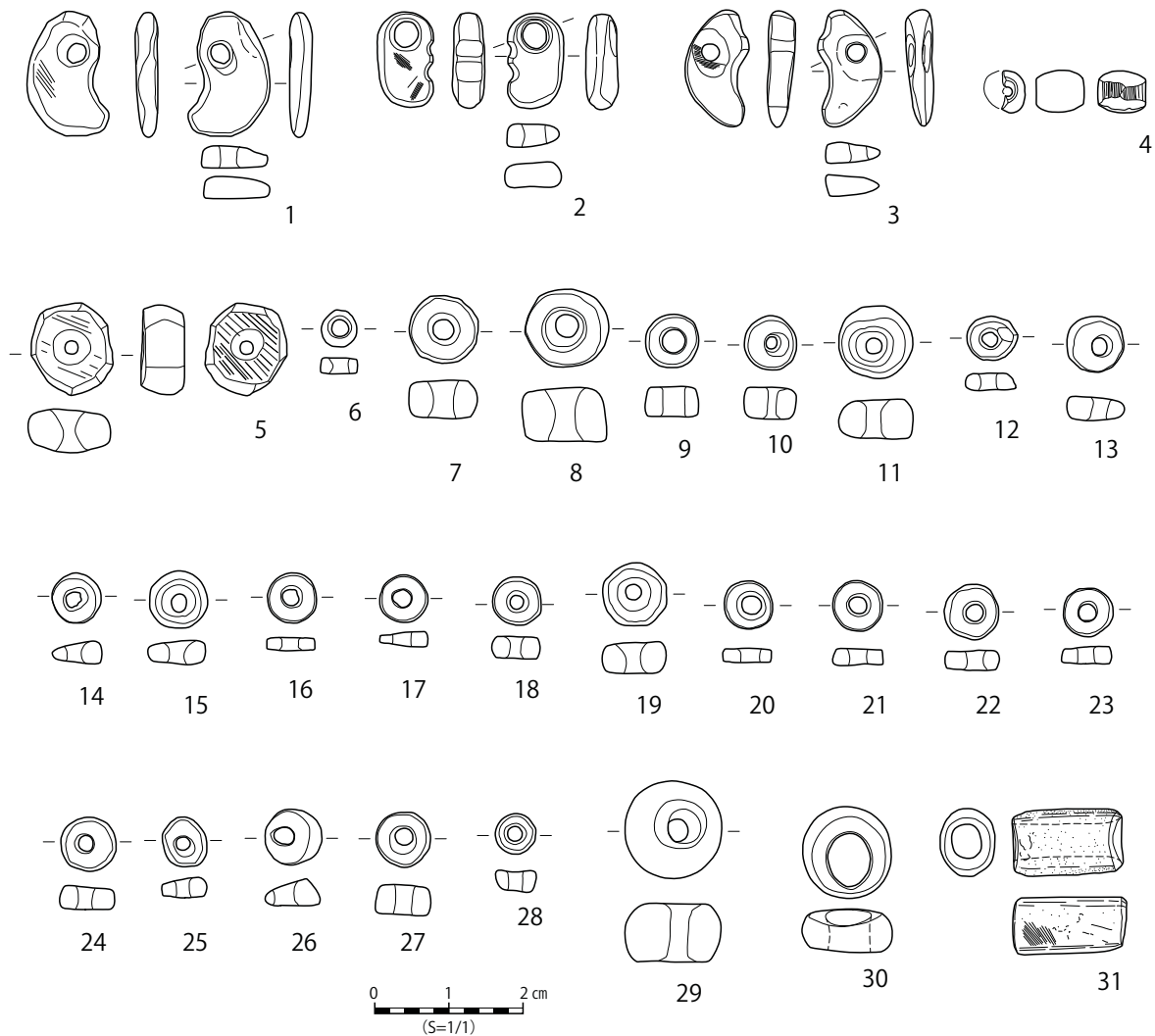


図 44 山王冨遺跡石製品 8 玉類

図 44-31 はネフライト製の管玉である。注記はないが台帳から東区 14 層（大洞 A 式期）出土と推定される。被熱により劣化する。長さ 1.4 cm、最大径 0.8 cm、1.3g である。横断面は短楕円で、縦断面は中央がやや膨らむ。

第 7 節 岩版（図 45-1～5）（図版 40）

岩版は 5 点ある。出土位置は西区 V 層（大洞 A2 式期）2 点、西区 VI 層（大洞 A1 式期）3 点で、大洞 A 式期にまとまる。図 45-1 は 7.5 cm 角の扁平四角形の礫を無加工でそのまま用い、線刻する。刻文は表裏面にあり、両面とも正中線を入れ、左右に弧文を入れる。弧文が表面に左右 2 単位ずつ、裏面には左右 1 単位ずつ配される。各弧文は一～三重ある。図 45-2 も図 45-1 に類似する。5 cm 角の扁平四角形の礫をそのまま用いる。刻文は正中線がないが、上下 2 つの凹みがある。表裏面の各左右に 1 単位の弧文が配される。図 45-3 は岩版側面の一部とみられる。西区 V 層出土である。比較的軟質な凝灰岩が用いられているため劣化が進む。破片 4.5 cm 分が残り、全体形は幅 10 cm ほどの長方形もしくは長楕円形の大型品に復元される。刻文は表裏面とも多重の弧文がみられる。図 45-4 は緻密な細粒砂岩

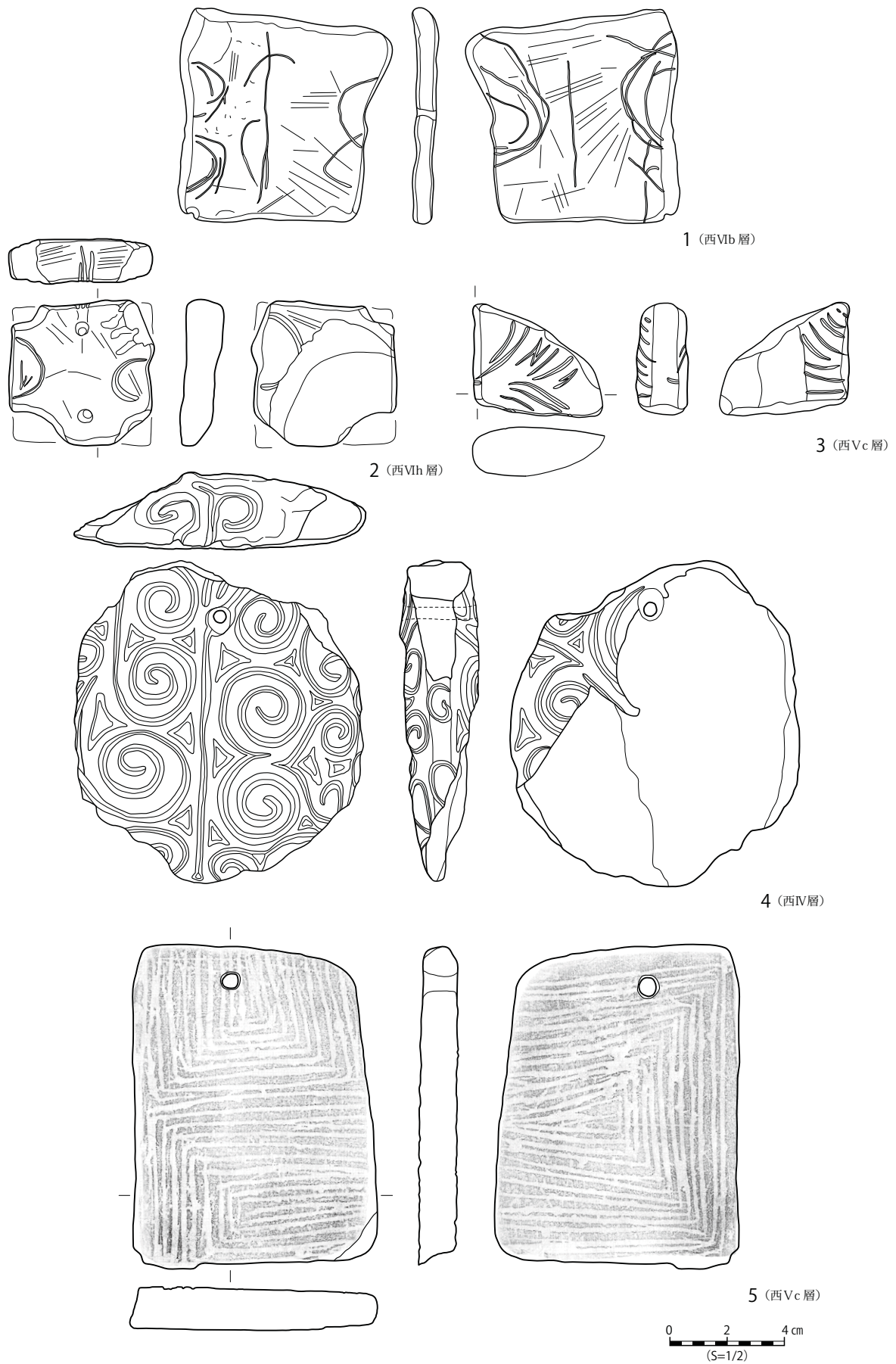


図 45 山王冢遺跡石製品 9 岩版

で裏面を欠くが全体形は復元できる。注記がないものの、伊東・須藤（1985）によれば西区Ⅵ層とみられる。全体形が楕円形でハンバーグ状を呈する。長さ 11 cm、重さ 200g 以上の大型品である。刻文は端部に孔がある正中線を入れ、その左右に三単位の渦巻文を縦に配す。この渦巻文から派生して側面近くにも渦巻文を埋める。渦巻文間の隙間には三叉文を充填する。裏面は刻文の大部分を欠くが渦巻文があったとみられる。孔は貫通する。図 45-5 は西区Ⅴ層出土である。1/4 ほど 11 × 8.5 cm 分が残る。復元すると 20 × 16 cm の大型品になる。板状の凝灰岩の角を研磨し、長方形にする。刻文は表裏面とも多重のコの字形文で、表面は上下 2 単位、裏面は 1 単位を全面に配す。本来はおそらくこの文様が左右上下対称に配置されていたとみられる。上部側に穿孔する。この穿孔も左右 2 つあったうちの 1 つとみられる。

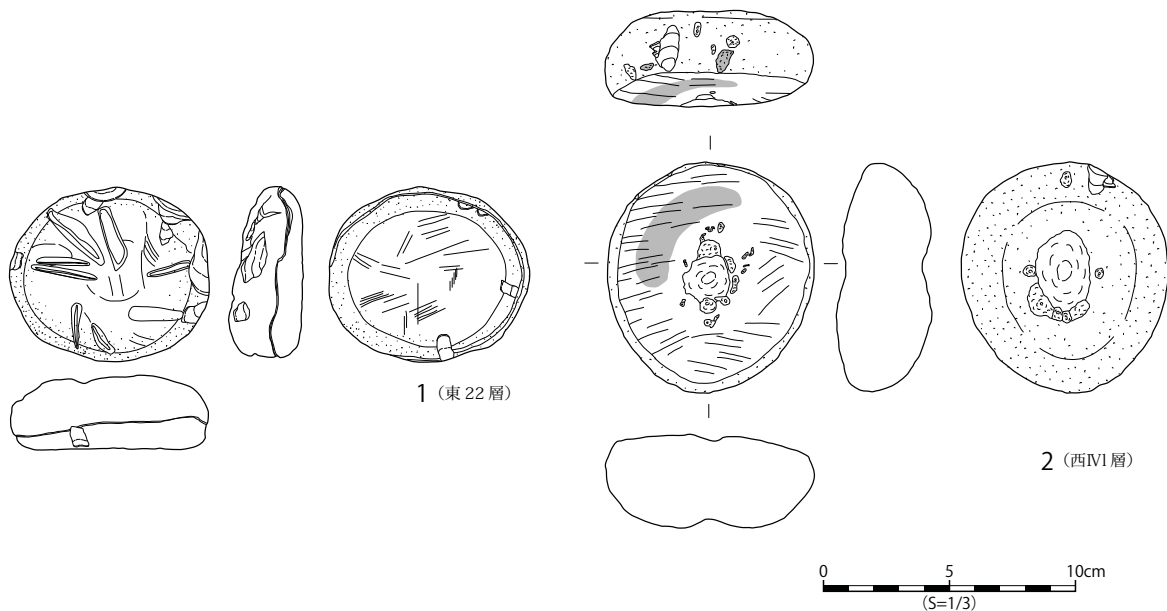


図 46 山王冨遺跡石製品 10 その他石製品

第 8 節 その他石製品 (図 46-1・2) (図版 41)

軽石あるいは凝灰岩といった軟質な石材を加工した製品である。出土位置は東区 22 層と西区Ⅳ1層で、大洞 C2 式～大洞 A 式期に該当する。一見磨石のように見えるが、軟質な素材で意図的な面取りや凹み、沈刻がある。図 46-1 は表面に放射状に沈刻を入れ、側辺に 1 条の沈刻が巡る。裏面は研磨し平坦にする。2 は表裏面中央に径 3 cm、深さ 1 cm ほどの凹みを入れる。この凹みは平面形が円形、断面形が半円状で、内面が磨かれ定型的である。このことから使用痕跡の凹痕とは異なり、意図的に作り出された凹みと判断した。赤色顔料が付着する。

(木村隼士・上條信彦)